

外来での症状・症候による 感染予防のための問診票の評価

山本洋行¹⁾，矢野久子¹⁾，長崎由紀子¹⁾²⁾，堀田法子¹⁾，脇本寛子¹⁾，
前田ひとみ³⁾，岩田広子²⁾，鈴木幹三⁴⁾

1)名古屋市立大学看護学部

2)名古屋市立大学病院看護部

3)熊本大学大学院生命科学研究部

4)名古屋市緑保健所

はじめに

- ◆ 新型インフルエンザ等の新興・再興感染症の流行を未然に防ぐために，外来における感染予防対策の実践が重要である。
- ◆ 外来の特徴
 - 診断前の患者が来院する
 - 医療従事者と非医療従事者の多職種職員が勤務する
 - 患者-職員間， 患者-患者間で感染が拡大するリスクが高い
- ◆ 外来で感染症を疑う症状のある患者の振り分けが重要である。

目的

- ◆ 感染症の症状・症候に関する問診票が，外来における感染予防対策に有用であるか評価を試みた。



方法

【期間】

2009年10月～2011年3月

【対象】

A病院(感染症科の標榜無)の外来を受診した**初診患者**

【方法】

医事情報と**問診票**を照合しSPSS(Ver. 18)にて解析

- 医事情報：年齢・性別・受診日時・診療科・診断名(受診日から3ヶ月後以降に診断された病名)
- 問診票：初診外来受付で記入

【倫理的配慮】

2009年8月 名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会とA病院部長会議にて研究倫理の承認を得た

問診票の質問項目

【患者基礎情報】

氏名，生年月日，受診日時，ID番号

【問診項目】

- ①高い熱(38℃以上)がある
- ②せきがでる
- ③のどが痛い
- ④鼻水やたんが出る
- ⑤からだのふしぶしが痛い
- ⑥からだに発疹がある
- ⑦下痢または嘔吐の症状がある
- ⑧目の赤みや異物感(ゴロゴロした感じ)がある

初診外来受付

- ◆ 外来では医療従事者のみでなく、医療事務、ボランティア等が主に初診患者の対応をしている。
- ◆ 主に受付職員（医療事務）が問診票を受けとり、該当する問診項目に沿って必要な対応を行っている。



感染症の疑いのある患者への対応

該当する 問診項目番号	疑われる感染症	受付者対応
①, ②, ④, ⑥	麻疹	来院者にサージカルマスクを渡し、着用を促す
①, ⑥	風疹, 水痘	
①, ②, ④	流行性耳下腺炎	
①, (⑥)	伝染性紅斑	他の来院者との間隔を可能な限り2m以上あける
(①), ②	結核	
①, ②, ③, ④, ⑤	インフルエンザ 新型インフルエンザ	対応後手指消毒を行う
(①), ⑦	感染性胃腸炎	対応後手指消毒を行う
⑧	流行性角結膜炎	

結果

- ◆ 初診患者数：26,503人
- ◆ 有効回答数：23,065人 (回収率87.0%)
- ◆ 問診項目の何れかに該当すると回答した人数：
5,290人 (22.9%)
- ◆ 感染症患者数：1,398人 (6.1%) (重複無)

内、問診項目の何れかに該当すると回答した人数：
1,248人 (89.3%)

問診項目別の回答人数

n=23, 065

問診項目	回答人数	
	(人)	(%)
①高い熱(38℃以上)がある	803	(3.5)
②せきがでる	1,850	(8.0)
③のどが痛い	1,282	(5.6)
④鼻水やたんが出る	2,057	(8.9)
⑤からだのふしぶしが痛い	1,156	(5.0)
⑥からだに発疹がある	726	(3.1)
⑦下痢または嘔吐の症状がある	861	(3.7)
⑧目の赤みや異物感(ゴロゴロした感じ)がある	680	(2.9)

(重複回答有) 9

問診項目の何れかに該当するとの回答と感染症の診断との関連性

n=23, 065

	感染症の診断		p 値
	有 (1, 398名)	無 (21, 667名)	
	人数 (%)	人数 (%)	
問診項目の何れかに 該当するとの回答	有 1, 072 (76. 7)	4, 218 (19. 5)	p < 0. 001
	無 326 (23. 3)	17, 449 (80. 5)	

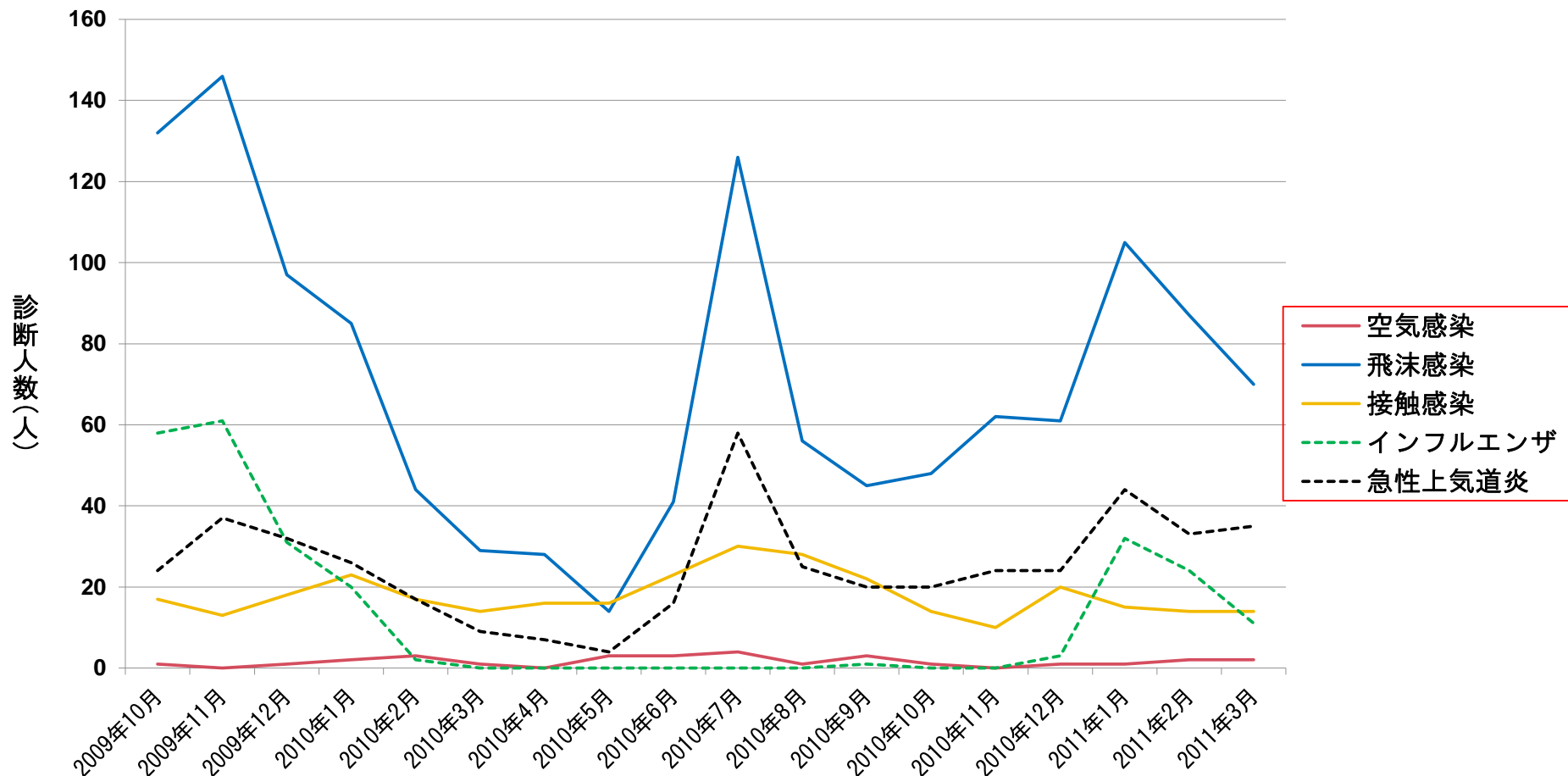
(χ^2 検定)

感染経路別に見た問診項目への申告率

- ◆ 感染症患者：1,651人(7.2%；有効回答数に対して)(重複有)
- ◆ 診断名から主たる感染経路別に分類した

感染経路 (主たる疾患)	診断名数(重複あり)(人)			申告率(%)
	問診項目の何れかに 該当するとの回答有	感染症患者数(%) (n=1,651)	申告率(%)	
空気感染	15	29	(1.8)	(51.7)
(結核)	9	21	(1.3)	(42.7)
(水痘)	5	7	(0.4)	(71.4)
飛沫感染	1,120	1,298	(78.6)	(86.3)
(インフルエンザ)	241	245	(14.8)	(98.4)
(急性上気道炎)	382	456	(27.6)	(83.8)
接触感染	153	324	(19.6)	(46.2)
(感染性胃腸炎)	63	84	(5.1)	(75.0)
(流行性角結膜炎)	6	7	(0.4)	(85.7)

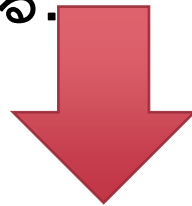
感染経路別に見た感染症患者数の推移



- ◆ 飛沫感染による感染症患者は、夏季と冬季に増加した。

考察

- ◆ 外来初診患者で、問診項目の何れかに該当するとの回答がある者は、感染症と診断されることが有意に高く、**外来職員等の適切な対応が重要である。**
- ◆ 外来職員等への**標準予防策や感染経路別予防策についての教育、感染症患者に即座に対応できるシステムの充実が重要である。**
- ◆ 感染症の中でも飛沫感染によるものが多く、**外来での咳エチケット等の飛沫感染対策の徹底と、インフルエンザや急性上気道炎等の感染症の発生動向についての情報を周知し流行期に合わせて対応の強化等をしていくことが重要である。**
- ◆ インフルエンザに罹患した患者の申告率は高く、問診票の活用により外来でのインフルエンザ対策に繋がる。



症状・症候による問診票は、患者の自己申告による感染症者の振り分けを可能とし、外来での感染予防策の一助として有用であることが示唆された。